

# 令和 4 年度農水関連第 2 次補正予算案発表

## 総額 8,206 億円 肥料関係予算は 270 億円計上

農水省は令和 4 年度の第 2 次補正予算案を発表した。総額 8,206 億円のうち、大きく 3 つに分けて物価高騰影響緩和対策が 1,127 億円、食糧安保構造転換対策は 1,642 億円、TPP 等関連対策では 2,704 億円が予算案として計上されている。物価高騰影響緩和対策の目玉は何と言ってもロシアのウクライナ侵攻が発端となっている燃料価格と飼料価格の高騰だ。施設園芸等燃料高騰対策として、ポイントは計画的に省エネルギーに取り組む産地を対象として農業者と国とで基金を設立し運用する事だ。燃油・ガスの価格が一定の基準を超えた場合に補填金を交付する。

2 つ目に漁業経営セーフティーネット構築事業として、燃油・配合飼料の価格が一定基準を超えて上昇した場合に漁業者等と国による積立金を原資として、漁業者・養殖業者に対して補填金を交付する。予算額は 330 億円となっており国民が乗用車等に利用するガソリン価格の高騰時に行われている補填と同じような仕組みだ。その他に配合飼料価格高騰緊急対策として、とうもろこし等の飼料原料価格の上昇等による配合飼料価格の高騰に対応し生産者へ補填金を交付する。予算額は 103 億円となっている。

3 つ目に食糧安全保障構造転換対策の目玉として肥料関連の施策案が大きく予算案化されている。日本は石灰石を除いて肥料原料資源はほぼ海外に依存していることは周知の事だが、国内における肥料原料として利活用可能とされている未利用資源の有効活用促進化と肥料原料の備蓄施策に予算案化された。国内産の肥料原料は当紙でも取り上げた、家畜糞の利活用促進とその実証データの蓄積、下水汚泥資源の有効利用化に向けた技術開発及び実証に 170 億円、主要肥料原料の必要水準の備蓄に要する保管経費及び保管費用、施設の整備に要する経費として約 100 億円が計上されている。特にリン安や尿素など中国産肥料原料の依存度が高かった日本は同国による肥料検査体制が強化された昨年 10 月以降より今年の春肥向けの原料供給が一気にタイトとなってしまったのは記憶に新しい。更に、ロシアのウクライナ侵攻も追い打ちをかけた。日本の経済制裁によりロシアやベラルーシ産の塩化加里の輸入はストップを余儀なくされた。これにより、日本の食料安全保障の観点から肥料原料の安定調達喫緊の課題となり、肥料原料として国内に眠っている家畜糞や下水汚泥の利活用の促進化と原料備蓄が対応施策として掲げられたわけだ。

さて、この補正予算は今後の家畜糞が利用者にとって使いやすいようにペレット化する設備に投資する補助や流通設備の新設補助等の利用、下水汚泥の安全な活用方法の検討や回収リンの効率よい生産技術開発や設備新設などに活用される事となるだろう。家畜糞の発生元は同然乍ら畜産業者となるのだが、どうにもタイミングがよろしくない。昨今の飼料価格や燃料価格高騰で畜産業界は全般的にかつてない経営悪化に直面している。牛乳や鶏卵や肉等もなかなか価格転嫁が進まずに苦しんでいる。脆弱な資金繰りが続く経営者にとってもこの補正予算は活用したいところなのであろうが、全額補助ではないため設備投資するにも熟慮が必要だろう。下水汚泥のリン回収についても下水処理場の多くは自治体が管理しているため、回収リンの設備投資にも議会での承認手続きが必要な事と、そして何よりもその投資が住民にとって理解を得るに堪えるかどうかとも必要となるためどれくらい補助金申請に応募されるかは未知数だ。次に肥料原料備蓄についてだ。肥料原料の多くは中国の肥料検査強化が発動されて以降、主要原料である尿素やリン安、塩化加里については全農や世界規模で商売している総合商社が手腕を発揮し中国産原料から代替国への振替調達が進んでいる。振替した原料調達国に新たな危機が発生しない限りは最大の需要期となる来年の春肥向けの主要原料の確保は鋭意進んでいる状況だ。現在、流通在庫も含めると国内におおよそ 3 か月分の肥料原料があると言われている。はて、

(次ページへ続く)

(前ページより続く)

必要な水準の備蓄とはどれ位が相応しいものだろうか？今回の予算案はあくまでも保管経費及び保管費用、施設の整備に要する経費としての予算となっている。日本の肥料原料価格は国が決められているわけではなく、国際市況や為替変動を加味して全農が決定する建値がベンチマークとなっている。今回の制度では原料調達リスクは仕入側が負う事になっている。価格変動リスクを負わざるを得なくなる状況を鑑みると、この制度はもろ手を挙げて施策に乗れないのが実情となっているのが気にかかるところだ。

## 寒くなってくるこれからが旬！ブロッコリー

朝晩の冷え込みが厳しい季節になってきた。縮こまって通勤・通学をしている私たち人間とは反対に、元気になってくるのが旬を迎えるブロッコリーだ。アブラナ科の緑黄色野菜で学名は *Brassica oleracea* var. *italica* といい、カリフラワーやロマネスコ、キャベツやケールと同じ種に分類される。これらはみな涼しい気候の地中海原産のため、秋から冬にかけてのこれからの季節が得意なのである。私たちが食べているブロッコリーの部位は「花蕾」、すなわち蕾にあたる（似たようなルックスの野菜にカリフラワーがあるが、こちらは「花芽原基」、すなわち蕾の一步前の段階の状態を食べている）。多くの野菜で作付面積が減少しているこのご時世には珍しく、ブロッコリーは年々作付面積を伸ばしている。農家にとっては作業にかかる労力が比較的少なく（とは言え暑い時期の育苗や定植、中耕などの管理作業は大変）、消費者にとっては栄養価が高く冷凍でも広く利用できる点がこの伸びに影響しているのであろう。旬はこれからのはずだが、国内産品を年中スーパーで見ることができる。これには華麗なる産地リレーが貢献している。

旬の作型である「秋冬採りブロッコリー」は夏から秋にかけて播種・定植を行う。この時期はどの地域でも比較的栽培しやすく、産地は埼玉や愛知、香川、徳島、鳥取など全国に渡る。キュッと締まって青々とした品質の良い花蕾が店頭に並ぶ。

「春採りブロッコリー」は早くから育苗・定植が可能な愛知や長崎が主な産地になっている。この時期は育苗期が低温と被るため、葉枚数を確保できていないうちに小さな花蕾がついてしまう「ボトニング（早期抽苔）」や、生長点が生育停止してしまう「ブラインド（芯止まり）」が起きやすい。育苗ハウスをしっかりと加温したり、障害を起こしにくい品種を利用したりするなど、栽培にも工夫が必要だ。

涼しい気候を好む作物なだけに「夏採りブロッコリー」はより難しい作型である。夏場の高温に遭うと、様々な生理障害が起こりやすい。花蕾がぼこぼこした形になる「不整形花蕾」や、生育が栄養生長に傾いて蕾の間から葉が発生してしまう「リーフィー」、花蕾の粒一つ一つの生育が不揃いになってその名の通り猫の目のようになる「キャッツアイ」、蕾が枯れて黄色や茶色になってしまう「ブラウンビーズ」などなど…。言わずもがなこの時期の産地は冷涼な北海道や、高冷地の長野が中心になる。



西園寺の「キャッツアイ」を生かしているブロッコリー

土壌や肥料に関して栽培上の注意にも触れておこう。裏作や転作としても栽培が広まっているブロッコリーだが、元が田んぼのような土地では湿害を防ぐため排水性を確保することはもちろん、酸性土壌で発生しやすい根こぶ病を抑制するため土壌酸度矯正や防除を行うことが必要だ。また窒素過多やホウ素欠乏により茎の内部が空洞化する空洞症が発生しやすくなるため、その他の要素も含めて過不足に注意した管理を心掛けることが重要である。美味しく栄養価も高まっていくこれからの季節。栄養成分のスルフォラファンは抗酸化作用が高く、肝機能の改善や、がん抑制、薄毛にも効果があるといわれている。購入の際は産地の変化にも気を留めつつ、茹でたものや素揚げ、グラタン等々にして味わってみてはいかがでしょうか。（東京支店）

12 月初めにかけては暖かい日が続く予報です。コロナ対策の換気をするには暖かい方がいいですね。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>